

101 (莊子の)「齊物論が説く万物はみなひとしい」という考え方は、今の私にとって心に熱く伝わってくる言葉である。

102 また(莊子の)寓言篇のなかの話は、私の気分をしつとりと和らいだ気分にしてくれる。

103 しかしながら(初夏の)景色は老荘のいう夢よりも奥深くみえ、

104 自然の趣を愛でるといふ(詩人としての)私の性癖は、まだなおつてはいない。(悟りきっていないのである)。

105 私の創作し得た詩文は、いったいどこに散り落ちていくのだろうか。

106 私の今の感情・情感はどうしても眼前の風物に引き止められてしまうのである。

107 (それを押し止めるべく)大志を抱いていても認められず郷里に帰り不遇でありながら節を曲げなかつた後漢の馮衍を憐れみ、我が身を慰めようとしたり、

108 (同じく)文人として秀でた才能を持ちつつ不遇をかこっていた王粲が、その想いを綿々つつづつて、己れの「憂い」を消そうとしたその文才に羨望の念を抱いたりもした。

109 (しかしながら今の私は、と言えば)私の一言が忌諱に触れることを恐れて(その想いを形にすることすらはばかられるのが現状である)。

110 (それを押して)胸中の押し止めようもない衝動につき動かされて書きなぐるものだから、筆先は擦り切れてしまった。

【十二段】

111 これらの草稿ともいふべき推敲の不十分な詩文は、いったい誰に見せるというのか。